

蝸

牛

(懸賞一等)

一部三年甲二 山 行 く 人

一

銅像になつて下の有象無象を瞰下して見るのも面白い。屋根裏の哲人は巴里の階上から、かうやつて十二ヶ月の社會觀を書いた。眞似して見たいといふ希望は僕にもあつた。しかし僕の室から見えるものは青い空と黒い土とばかりである。實社會の私語は壁一重を隔てゝ聞き分け難い。家に居ては手が届かぬ。しかし世の中は覗きたい。そこで旅行がしたくなる。松に鶴、竹に雀、梅に鶯は最早舊式の配合である、廿世紀の間は旅行に夏休みを添へ夏休みに旅行を配する事を忘れてはならぬ。政治にも舞臺がある。旅行をするにも舞臺があると思ふ。若し學生の旅行に舞臺があればそれは夏休みである。夏休みは旅行を藉りて命を保つ。旅行は夏休みに由つて魂が籠る。殊に此の感を深うするのは我々學生である。愈といふ言葉は待ち構へて居た意味の言葉である。夏休みが來ると愈と云ふ言葉が自然に口から洩れる。大早に雲霓を望む心地で我々は夏休みに遠望の眸を放つ。此の遠望は暇があれば休まうといふ怠惰心に礎を置くものと見るよりも、寧ろ何か望み通りの事をしようとする活動心に根を持つものと解釋する。

丁度土曜の課業が済んで明日が日曜と定まつた時、暖かく胸に湧き出づると同じ感じを、我々は夏休みに對して起すのである。しかも年に一度しか來ない休みでもあり、比較的長い休みでもある所から、日曜そのものよりも強く感情に訴へるのである。誰かの譬喩のやうに人生を繪画と見れば、夏休みはブランクな白紙

である。彩色は各人が持つ期待の筆の動くがまゝに施される。画き終つた繪に働く情は單調純一であるけれども、画き上げぬ前の紙を彩どる空想は多種多様であるやうに、過ぎ去つた夏休みに對する感想は丸く固まつたものだけれども迎へ来る夏休みに對する感想は亂れ髪のやうである。そして昔の夏休みが無量の思ひ出となればなるほど、今の夏休みはより無限の樂しみを以て豫想せられるものだ。夏休みを迎へた我々の心は、御大赦に遭ふた出獄人の心である。字引に釘付けられて居た眼は、何を見ても良いと云ふ許可を受ける。講義にのみ敬てられた耳は、何を聞いても良いといふ特典に預る。書齋の閫を跨いで一步世間へ踏み出したばかりでも忝けない所へ、いろんな物が指を揃へて早く早くと招いて呉れる。學校以外に招くものゝない學生。外に招くものがあつても傍へ寄つてならない學生が、二つ返事で飛んで行くのも無理は無い。

僕も招かれて家を飛び出した一人である。僕を招いたものは旅行である。それも一つは身体の保養のためであつたが、精神の保養にもなつて居た。不知不識の間に生きた世間を眺めるためにもなつて居た。しかし短かい經驗の糸で深い淵の底まで探れようか。社會觀といふ言葉さへ臆物に觸る心地で遠慮して居るのに、人をアツと驚かせるだけの筆がまわらうか。恐らく大方の冷汗を絞り出すと云ふ以外に何等の反響も無からうと思ふ。

これは豫定の結果として納得する。しかし現代の流行が新らしきを趁うて、新らしければ必らず人を驚かすといふ斷言が通用する時代に當り、僕は古きを温ねて新らしきを知るといふ格言にも深長な一理を見出すのである。さう云ふ格言そのものが古い乍らに新らしい意味で使はれて居るばかりでなく、眺め方に由つて新らしくなつた古い物も少くないやうに思ふ。恐らく一番古さうで、苔も蒸さず黴も生えず、始終我々の眼に

掛つて居るものは、この地球と、かの太陽と、その中間に在る月とであらう。揃ひも揃つて古物展覽會に出ないのが不思議だと疑はれる位だのにそれがどうであらう。月に就て見ても、あの幾百といふ詩、幾千といふ歌が、夫々の趣を備へて詠み出されたのは何故であらう。これは時に古今があり洋に東西があるといふ以外に、眺めた人の眺め方が夫々に異つた事も認めねばならない。即ち新しいといふ感想は、必ずしも對象の新らしきを前提としないことになる。素より對象が新らしければ使ひ古した眼にも、新らしい色は映るであらう。しかし對象が古くても味ひ方が新らしければ、新しい匂のするのも事實である。若し眺め方が新しい上に對象が新らしければ、二幅揃つてこの上の言分は無い。けれども省みる所、僕の取り扱うた對象は古さうである。その眺め方も新らしさうには思へない、竣つ所は見る人の新らしき頭に在る。たゞ自分としては、遊ぶために遊んだ旅行でもなく、暇過ぎて困るためにした觀察でもないのを、せめてもの取り所として慰めて置く。見る人もどうかこの自画自讃を諒として、欠伸し乍らの眼を通す寛大を持つて下さい。

二

兎も角僕等の出發したのは、氷賣の觸れ歩く、日當りの良い夏の日であつた。重そうな荷物を輕さうな旅装で擔ぎ乍ら、停車場へ駆けつけたのは十一時過ぎであつた。暑い眞盛りである。歸省の喜で心臓の躍つて居る學生は、暑氣に融けて正体もなくベンチに凭つた他の乗客を肩越しに眺めてゐた。僕はこゝにも若き者の凱歌を聞いたのであつた。愈改札の時刻が來た時に、母は六つの弟を抱きあげて、氣懸りなだけの注意を與へた。弟は首を豎に振つて聞いて居たが、どうも母さんもゐらつしやいと袖を振つた。母は黙つて弟の頭を撫で、改札口から出してやつた。ブラットホームを行く僕等の勇み立つた歩みぶりを、母はどんな胸で

見た事であらう。母と一緒に送つて呉れた病氣の弟は、自分の慘めさにひき較べて僕等に、羨望の瞳を注いだこと、思ふ。ブリツチを渡ると直ぐ汽車が來た。乗ると直ぐ徐ろに動き始めた。御機嫌ようと云ふ言葉を饒にして、僕と六つの弟は母と病氣の弟に別れたのである。乗客の使ふ扇子の閃く隙間に見えた二人の影はやがて汽車のうねりと共に消れてしまつた。停車場は同じであつた。別に變りもなかつた。しかし僕等には出發する喜を與へ、二人には見送る淋しみを與へたのである。

汽車は長い煙を延いて走つて行く。僕は長い思を抱いて乗つて行く。列車も長ければ線路も長い。時々汽車が跨いで渡る河も長ければ、いつも同じ處に鎮坐して居るやうな遠山の屈曲も長い。ただ何となく凡てのものが長いやうであつた。いくらか氣の所届と見て割引しても、正直な打算は僕等に旅の長い事を叫びた。熊本から門司へ出て、下關から大坂へ上るだけでさへ、一日一夜列車の動搖を忍ばねばならない。大坂から京都、京都から米原、米原から名古屋を経て中央線を木曾に沿うて郷里まで上る間、合せて六百數十哩の行程は、着いた後でも長い草臥を感じさうである。乗り出した初めには尙ほ更ら長く感ぜられたのであつた。何もかも無心な弟は、只管景色の移り變りを喜んで送り迎へた。一哩がどれだけか見當も付かず、ごちらへ行くのか方角も分らない弟は、これから先の退屈を豫じめ知らぬだけ幸であつた。頻りに窓から出した首を右に左に動かして頓著する所もなかつた。石炭の煤がかゝつても平氣である。危ないと諭されても聞き入れぬ。頑固なのではない。當然なのである。砂煙を浴びてまで、物珍らしい自働車の跡を追うて廻つた凸坊としては。しかし何しろ後凸前凸の大頭なのが、懸念であつた。殊に汽車から落ちて死んだ話をいくらか聞かされて居ただけ懸念が強かつた。これは或る若い奥さんの話であつた。芽出度産み落した男の子を連れて、

良夫の任地へ行きがけの事であつたさうである。暑い時ではある、汽車の中は蒸す、情氣は身体のところら中に廻つてくる。險呑と思はぬでもなかつたが、窓際に凭れて涼しい風に髪を颯らせ乍ら、居睡りをやつて居た。何かの機みに眼が醒めた。眼が醒めた時に髪がぐらついた。髪がぐらつくと同時に、翳して居た櫛は窓の外に落ちた。その櫛は高價なばかりでなく結婚當時の紀念物であつた。アレツと悲鳴をあげて奪はれた櫛を取り返さうとしたのは、婦人の情として尤もなことであつた。けれども夢中に手を窓に出した婦人は夢中に抱いた乳呑兒を窓外に投げ出してしまつた。速さは速し、高さは高し、それに子供の年が年なので無残な悲劇に終つたと云ふ話がある。それとこれとは違ふけれども、僕の腕は弟が首を窓に出す毎に其の帶を攫んで居た。しかし弟の眼の働きを妨げる氣はなかつた。そこでは弟の見ただけ見せる方針を執つた。どうしても子供の知識は實地見聞で廣めるのが最も自然だと思ふ。一度弟を捉へて時間の區別を教へやうとした時昨日と今日と明日の區別の説明に迷つた事があつた。どう考へても適當な譯語が見付からない。胸には分つて居ながら咽喉には出で來ない。自分かどうして覺えたものかそれも思ひ出せなくて弱り入つた苦い經驗がある。其の時初めて小學教師に同情が出來た。耳よりも目に教へるのが先だと思つた。それで蒼蠅いほごに出す質問に一々答へたばかりでなく、時には此方から質問を持ちかける位にした。弟は途方も無い奇問で僕を手古摺らせる。僕は思ひも付かぬ難題で弟をきめつける。子供は大人となり、大人は子供となつて、慰め合つて行く中に、汽車は長洲の海岸を眼界に齎らした。温泉嶽と書いただけでも湯氣が立ちさうである。有明海と口號むばかりでも俳句になりさうだ。靜かな海を靜かな山の裾に沿うて漕ぐ船も亦靜かに見わる。暫くは弟の事も忘れて見とれて居た時に、「兄さん」と弟が手を引いた。景色を御覽と云ふと何か頂戴と云ひ

返す。弟はもう景色に飽いて、食物を欲しがつて居るのであつた。子供は食欲に手足の附いた生物である。汽車中の手持無沙汰は人の食指を動かす魔力がある。僕は夏蜜柑を剥いて弟に渡した。弟は甘さうにそれを食べた。食べた弟は無論満足した。甘さうな様子を見て居た僕も満足した。しかし弟の満足は長く續かなかつた。暫らするとも一つと僕にせがみ始めた。僕は此處で新しい問題に突き當つたのである。暑い時分に咽喉が渇く。これは尤もである。咽喉を濕はすために蜜柑を食べる。これも無理はない。しかし食べた時の味ひが涼しければ涼しいほど、食べてしまつた後の物足りなさを強めるやうなものである。假りに一箇の夏蜜柑は當分の渇きを止めるとしても、後の何時間と云ふものをどう片付けよう。食べれば満足には相違ないけれども、食べ通しにするだけの胃袋が無いのにどうしよう。愈食べられないとなると情を抑へねばならぬ。それが嫌ひなら何かで紛らさねばならぬ。しかし他所へ行く度毎に、人を泣かすかさもなくては自分が、泣かせられて歸るのが弟の常であつた。それだけ血を見たり涙を見たりする事に慣れて來た弟は、靜止した繪巻物を遠望するやうな景色を、早晚慄らす思ふべきであつた。そこで食物に隠れようとしたわけである。食べたいといふ望みに限りは無い。食べて良い物は有り餘つて居る。けれども食べる本人が不甲斐ない消化器しか持ち合せて居ないとなれば已むを得ず程度問題にぶつつからねばならぬ。丁度眺め行く有明海の一角のやうに、水天髣髴としてけじめの立たぬのが程度問題だと思ふ。その漠然とした雲の中に攫み所を拵へるのは偉人でない以上出来ない相談である。下さいと頻りにせぶる所を見ると、生憎弟は偉人でない。偉人の雛でもなかつたのである。僕は弟の頭を撫で乍ら口を開いた。身体の大きいものは餘計渇くだらうねと尋ねるとはいふ云ふ。じゃ兄さんは前よりも渇くだらうと念を推すと、そうらしいといふ顔付である。じゃ兄さんさ

へ辛抱して居る、た前は賢ひから辛抱するだらうと問ふと、莞爾した齒を見せたが、それも一時の事であつた。遊ぶ玩具もなく、遊ぶ相手もない。さうかと云つて書物も讀めない弟は焦^{アセ} 出さねばならない。大坂はどこかと僕の肩を揺ぶつて訊く、弟が大坂を覺えて居るのは、そこに何時も御土産を貰ふ叔父さんがあるからである。しかし大坂以外にどこも知らぬ弟にどこと言ひやうが無い。僕は黙つて笑つて居ると、今度は何時大坂に着くかと訊ねる。大坂に着けばその叔父の所へ立ち寄る豫定であつた。僕は明日の夕方と答へた。弟は汽車に苦情があるらしく見えた。そして突然靴を足にかけたまゝ、列車の入口まで走つて行つた。走れば早く着くと思つたに違ない。走つても汽車の中では骨折損といふ事を知らないものであつた。その蔭で嫣然^{ニッコリ}微笑む事が出来たのは幸であつた。しかし結局は知るが佛である。知らぬが佛とは苟且の狂言に過ぎないと思ふ。愈する事が無くなつた時、弟は起つても坐つても居れなくなつた。時間が足りないで困る人の山ほどある世の中で、弟は時間の費ひ方に窮したわけである。弟が持つた最初の平和な心は、地理に暗かつた無智の賜物であつた。しかし愈飽きが來た時に、方向も距離も分らないのが苦になつた。當てが無ければ無いほど焦^{アセ}り出す。焦れば焦るほど堪へられなくなる。萬全の策はどうしても万事を知るに在る。知ればこそ苦しむ。しかしその苦悶は落ち着きのある苦悶である。知らない者の苦悶は愚痴より出でて際限を知らぬ。此れは暗室に物を捜す苦悶であり、彼れは囊中に物を探る苦悶である。前者は捜し出した時の喜こそ強いが、それは萬に一だと思はれる。多くは餘計なものを攫みあげたり、餘計なものに突き當つたりして居る中に息が絶わる。後者は探り初めから程度を見縊つて居る。初めから躍り立たぬかはり、終りになつても氣が弛まない。地理を知らない弟の藻掻き出したのは無理はなかつた。しかし藻掻く者を藻掻くまゝに放任した僕にも

無理はなかつた。とう／＼藻掻き疲れて僕の膝を枕に弟は眠つてしまつた。此の時は鳥栖を少し出外れたばかりであつた。久留米でいくら窮屈になつた列車内は、鳥栖で一層窮屈になつた。一等や二等はさうでもないかも知れぬ。しかし三等は乗合舟と同様であつた。悪く云へば掃き溜めと大して變りはないのであつた。塵埃のやうな乗客がその中でゴタゴタして居る。精一杯善く見ても折詰の鯨位にしか取り扱へぬ。折詰の鯨は行儀よく並んで居るけれども、三等の乗客は態度も風体も千差萬別である。乗客の下車驛が夫々異なつて居るやうに、何もかも異なつて居るだけ他の列車よりも豊富である。下品であるが單調でない。社會の百面相を縮寫した形で見る事が出来る。僕はこれが三等車の特徴であると思つた。同時に汽車の汽車たる所以は三等車に在りと考へた。何も一二等に對する負け惜しみばかりじゃないと自分では思つて居る。ありのまゝに眺めてさうだと自分では信じて居る。

弟が眠つて見ると子供も大人の氣紛らしになるものと悟る。生來考へる事の好きな僕は、獨りボツチになると頻りに頭を使ふ。自分の頭を自分が使ふには、人を使ふ時のやうな氣兼ねが要らぬ。氣兼ねが無いから無暗に使ふ。コキ使はれても自分の頭は愚痴を溢さない。茶碗に當つたり箒に當つたりせぬだけ下女男よりも重寶だ。何よりも自分の頭が一番相談相手になる。僕が淋しくなると此の頭が相手に來て呉れる。丁度鳥栖が畑越しに見ゆるやうになると、淋しがつて居る僕を訪れて熟く考へて見よと云ふ。今君はいろんな人のいろんな容貌や服裝を見た。顯微鏡を使はなくとも誰一人として似寄つた所が無いほどそれは多種多様であつた。しかしそこに共通した尊いものがある。君のやうな青年の持つて居ない貴重なものがある。君は何だと思ふ、それは落ち着きである。落ち着きといつても達磨の落ち着きとは違ふ。力士や重石の落ち着き

とも違ふ。此れは人の心の落ち着きである。人の心に波風の起たなくなつた事である。しかし沈著といふほど偉大な意味も無い。祭日があれば騒ぐ、火事があれば慌てる。電報が来れば驚く。それは人情の自然である所謂落ち着きは自己の出来ない事を知り、又自己のなし得る事を覺つた時に得られるものを指す。自覺といふ言葉がそんな意味ならば、自覺は落ち着きを與へるものである。自己の足幅が二尺しかないと知れば、一足で一間も行かうといふ無謀は出来ぬ。そんな無謀をやりながらそれを無謀と悟らぬ無智にはなれない筈である。けれども遙かに青山が見える。行きたくて堪らない。堪らなさが嵩じると無理でも非でも早く行かうとする。そこで焦り出す。落ち着きがなくなつてくる。落ち着きがなくなる事は言葉を換へて動搖する事である。動搖は高と低とが出来た時に初まり、高と低とが平均した時に終る。青年の志は大きい、しかし腕は細いのである。理想は高い、けれども經驗は浅いのである。此の矛盾が一見して分る如く、此の矛盾から動搖が生ずる事も一考して分る。此の動搖が變形して懷疑となり變装して煩悶となる。希望は一足飛びに行きたいと云ふ。實際は一步一步宛だと逆らう。東西に背馳した二つの傾向は、それが行き合つてびたりと一つになるまで落ち着きを與へない。青年の胸の中では此の二つのものが斬り合つて居る。互ひに勝敗があるけれども結局實際の劔は鋭い。青年が傷いた希望の傷口を宥め、酒や女で其の苦痛を紛らかさうとする時に現實は凱歌を掲げて敗軍した希望の愚を笑ふ。此の二つの傾向が握手するまで青年の胸は血腥い戦場である落ち着かうと思つても落ち着けない。落ち着いた人の心は淵の静けさである。けれども青年は高きに止まらうとする。水は低きに就かうとする。そこで淵となり得ないで瀧と落ちてくる。瀧には活氣がある、しかし落ち着きが無い。浅き瀬にこそあだ波は立て、人は淵とならない以上平靜なる事は出来ない。僕は敢て君に

出ふ。鏡を見よ、足もとを見よ、そして最後に目あてとする青山を見よ。頭を冷かに持て、胸には一物も留むるな、そして腹を充たして置け。これが落ち着きを得る捷徑である。

僕の頭は僕にこれだけの事を言つて聴かせた。此れは今度初めて耳にした言葉ではなかつた。一度ならず二度ならず訓へられ乍ら徹底しなかつた。しかし分らぬ乍らも正しいと信じて居た。

霧が晴れて遠くの正体を認めたのは、つい近頃の事である。つい近頃より以前の僕には、ナポレオンが未だ親しみのある言葉であつた。親しみのあるといふよりも權威のある言葉と云つた方が良いかも知れぬ。兎も角千古萬古に芳名を愛さねばならぬ。かう覺悟して雙の腕を撫で、居た。莊嚴に鑄られた銅像が、斯様な考へに囚はれた僕の空想に描き出されたのは當然である。ある時は下院三百の頭顱が自己の脚下に跪拜して居るやうに思つた。又ある時は首都幾萬の民衆が、肅々として練り行く僕の二頭馬車を仰視して居るやうにも思つた。此の時既に國家幾百萬の民衆を臂下に敷いても、自己一身の一片の榮華を頭上に戴かうといふ誤つた欲望が萌して居たのを知らなかつた。全く形骸の美に酔ふて手腕の實を養ふ努力が痲痺しかゝつて居たのにそれを知らなかつた。だから空漠なる天下國家といふ語に、僕の血は幾度か湧き、僕の肉は幾度か躍つた。幾度かどそれを數ふる沈著と餘裕とを持てばこそ、幌をかけた馬車馬のやうに、無鐵砲な進行を道外れの方向に續けて居た。今から思へば希臘の馬と少しも違ひはなかつたのである。希臘では御し難い馬と見ると、直ぐ杖を馬の鼻先に下げる。下げた杖に秣マゲサを結びつけて、それつとばかりに鞭で叩くさうである。鞭で叩かれずとも秣が欲しいばかりに馬は一目散に走る。しかし走つても走つても秣に口の届かう筈は無い。目先にブラ付いはて居る。しかし食べる事が出来ないのである。僕の目先にチラ付いた天下國家も畢竟するにこん

なものであつたらう。さなくとも餘程抽象的のものであつた事は眞實である。僕は天下國家といふ文字を習つたばかりであつた。靜止して居る天下國家に眼を注いだに過ぎなかつた。乃公出でずんば又蒼生を如何にせんと云ふ事は出来たけれどもその乃公はどうすれば大成されるか、將又蒼生はどんなものかに就ては了解しなかつた。眞の天下國家を胸に入れる一足先に、慷慨激語することの方が上手になつた。血氣性急な青年の特質は花が咲く前に櫻を截つた、そして切株の中に花を求めようと努めたのであつた。鶏を殺して卵を得ようとしたその失敗を、僕は異なつた形式で實驗したやうなものである。僕の描き上げて居た世界は空想として生きて居た。しかし實際としては死屍と同じであつた。僕は此の死屍を抱いて生ける人を髣髴して居たのである。けれどもかゝる空想は架空の虹同然である。美しいは美しい、しかし早晩消へ去るべきものであつた。だから光線が薄れ水氣が散ると共に、僕の眼に映つて居た虹は消えてしまつた。假りにハラハラと梧葉の雨を降らす秋の半ばであつたでしょう。その方が似合はしい。眞偽は沙汰の限りでない。秋の風聲に覺めた僕は眼を擦つて開いて見た。すると自己以外にも多くの世界を認めたのである。我れと造つて、我れと我が身を閉ぢ籠めた蠶の繭を食ひ破ると廣い世間はありのまゝに映つて來た。今までは唯我獨尊と氣張つて居た。氣張るために右も左も顧みなかつた。そして路傍に置き去りにした唯我獨尊の世界の、多々ある事に氣付かなかつた。それに氣が付いた時自分の肩身は狭くなつたやうに思つた。崖から飛び下りる積りで飛ぶと、椽から庭へ下りた位であつた。しかしそれだけ落ち着きがあつた。眺める世界も廣くなつた。大臣ばかりが人間でない、百姓も人間だと悟つたのである。我々に人生があるやうに、乞食にも人生がある。かう領かれたのである。あらゆる職業は神聖である、世間は我れ一人を迎へるためのものでない。此れも心が承知

したのである。磨硝子を通して眺めて居た人生、垣越しに看過して來た人生が、幾らか明瞭^{つゞき}と手近に見ゆるやうな思がするやうになつたのであつた。

此處まで進行して來た回想に負けず劣らず汽車も進行して居つた、櫛の林が出入する田代や原田は既に過ぎて汽笛はやがて二日市に近づいた事を知らせた。僕は窓外に目を注いだ。何か見るべきものゝ取り残されて居るやうな氣がしたからである。天拜山の一つ松を左に、右寶満山下に擴がつた太宰府一帯の地は、まだ管公時代の面影を留めて居るやうな心地がする。此れが昔乍らの管公配謫の地だ。かう思ふと慕はしい母の懷に抱かれに行く氣持がする太宰府は僕にとつて、平安朝時代の空想を畫き出す手臺の一つである。太宰府を見る度に平安朝の歴史を繰り返したやうな心持になる。丁度中學五年生の秋、修學旅行の一員となつた僕は、此處に管公の遺蹟を訪れたのであつた。都府樓趾とか、觀音寺とか、水城とか見た中に、太宰府其の物よりも僕の感興を惹いたものは、あの榎社であつた。僕は榎社で自己の理想的閑居を見出したと思つた。そこにも立つて天拜山の一つ松を拜み乍ら、淋しく訪るゝ松風に耳を籍すと、管公が目あたりに髮髯されて感慨無量であつた。其の昔日の感想が、榎社の方に注いだ目に映つた、榎社のそれらしい姿と共に新らしく湧き返つて來た。その瞬間の僕は馬子になつてもあの榎社の椽の上に臥して見たいと思つた。それ以外の欲望は隠れてしまつた。そして喜でもなく笑でもなく、しかも溢れこぼるゝ心の満足を感じて居た。今でも僕はその時の心理を解剖して見たいと思つて居る。たいそんな事に無頓着な汽車、それを流し目で見越して行く汽車はあつけないものであつた。汽車も外から見れば名殘惜しげな煙を長く延いて行く。けれども轆轤の音を立てゝ行く汽車の内部は無味乾燥なものである。情に潤ふことを知らぬ列車は、一刻一刻に太宰府と僕との間を遠

めて行く。僕は回想の糸で漸く兩者を繋いで行く糸は繰り出すほど長かつた。けれども割合に弱かつた。愈々博多に着くと、其の停車場の雑沓に紛れて緒を見失つてしまつた。それほど博多は僕の目も耳もアツツラクトする力を持つて居た。停車場からじて先づ粹である。電車の往來も慣れない目には開けて見わる。一種のアクセントを伴ふ言葉遣には、人を溶かし込むサムシングがある。圓い、柔かい、暖かい。滑かな華やかな垢抜けのした、淀みのない、暢び、暢びした、景氣の良い、活氣のある。僕は博多と聞く毎に、博多を見る度に、博多を思出す折々に、何の秩序も聯絡もなく、こんな感じに打たれるのである。

汽車は吉塚を離れると千代の松原にかゝる。兩側に立ち續く松林は、朝日にも夕日にも都合の良い翳しになつて居る。遙かに長い海の中道と、海の中道に抱き込まれた博多の入海と、其の入海の水際に這ひあがつて居る龍のやうな松と、凡そ長方形の車窓に輪廓づけられて行く一枚一枚のこれらの景色は、其の盡が立派な水彩の畫幅になつて居る。嗚呼美しいと見惚れた僕の頭には、何處にも此處が元寇のあつた所だと云ふ聯想を泛べて居なかつた。博多灣の風光が松林の中に消え去ると、來る驛も來る驛もつまらない所が多かつた。

博多で大分席が空いた蔭で、これから暫らくは僕も眠る事が出來た。目を瞑つたまゝ、獨り働いて居る耳を通して、香椎とか、福岡とか、赤間とか、遠賀川とか云ふ呼び聲を聞いて居ると、何とはなしに神武東征の昔の道を辿つて居るやうな氣がしてならなかつた。こんな時一種の調子を持つた停車場の呼聲は、音樂的に感ぜられるものである。身も心もうつらうつらとして折尾に着くと、多くの人の乗降の噪音に弟の目は醒めた。弟は若松に通ずる鐵道の交叉、排列の複雑なのを見て驚いた。八幡から枝光戸畑に亘る大規模の製鐵所には尙更ら膽を潰したやうであつた。空中に聳ゐた熔鑛爐を中心として、右には黒煙が昇る、左には石炭車が往

來する、こんな眼の眩むやうな活劇を見せる風景の方が、白砂青松よりも、眞帆船帆よりも子供に近づき易いものかと思ふ。靜的な風景よりも動的な風景に興味を持つ子供はどう見ても活動的である。これまで線路を挟むだ田畑や松林は後を絶つて、これからは石炭が線路の兩側に高低するやうになつた。同時に船の帆柱が疎々密々の美を盡して海岸に立ち並ぶやうになつた。やがて小倉の海岸が鐵道の道連れとなる頃には、入日が赤く餘光を波の上に流して居た。思へば六年前の夏季休暇の事であつた。僕は叔父に連れられて、此處に一月月の海水浴を試みた事があつた。當時の夕景と變らぬ小倉海岸の入日は思ひ合せて今昔の感に堪へぬのである。其の時分僕は中學の二年であつた。餘程悲觀して居たが神經衰弱ではなかつたかと思ふ。醫者も僕に向つて直接にそうは云はなかつたし、自分でもそんな氣持はせなかつたけれども。しかし當時僕の周圍では世界のありとあらゆる物が、僕に向つて悲哀の曲を合奏して居るやうであつた。僕の胸はだんく悲哀と共鳴するやうになつた。そして遂には慰安をすら悲哀の中に求めがちになつた。悲しんで居る時が何時よりも僕の心は和らいで居た。悲しい事を迎へる傾向は、悲しくない事にまで悲しい色を施す術を教へた。だから好んで僕はロマンチックな境涯を求めた。詩的な背景の中に身を置いて自から楽しんだのである。其の背景となつたのが此の小倉の海岸であつた。毎日夕膳を薄暗い臺所に残して出ると、浴衣がけの姿が三々五々散歩しかける頃海岸に着く。今しがた夕づく太陽が波の上に生み落した赤い龍蛇は、僕の足許に纏つて晃晃と其の舌を閃かす。其の時獲物も無さそうな舟が帆を下しかけたまゝ島陰を掠めて行く。長汀曲浦の細い線の上に、僕は孤影を曳いて棒杭のやうに立つ。そして千切れ雲の上に輝き初めた宵の明星を仰ぎ視るのが常であつた。夜の幕が濃くなれば濃くなるほど星の瞬きは鮮かになつて来る。どうしてもあの星は死んで居な

い。生きて何かを默示して居るのだと思はねばならぬやうになる。そして其の默示を受けて居る者が餘人ではなくて自分であると思ふ時僕は一種の満足を感して歸宅するのであつた。こんな果敢ない満足に憧憬^{アツガ}れて、僕は小倉海岸の夜の目參者となつた。或る時は黒い空氣を冷たく搖る海風を受けながら、漣の呟きの中に立つて、藤村操の巖頭之感を呟いた事もあつた。しかし壯嚴な宣誓でもやるやうな氣になつて居た。明瞭した意味が分つたわけではなかつた、正直に云へば未だに句意は徹底して居ない。文句の調子は神秘的だ。超世間的な氣はして居る。しかし華嚴に投じた人の眞意は、投じた人自身が人生に對して持つた如く、曰く不可解と言はざるを得ない。恐らく此の分つたやうな分らぬやうな所が、當時の僕を魅する魔力を携へて居たのだらうと思ふ。こんな因縁から小倉の沿岸を通る毎に、一種の文學的氣分に襲はれない事はない。外の人にはさほど感興を惹きさうにもない風景である。風景も亦外の人に對しては冷淡に構へて居るやうである。それに僕が通れば微妙な呟きをする、僕も可憐な思出を手向けるのである。

小倉から大里、大里から門司までは、こんな思出に耽つて過ぎた。電燈に華やいで見ゆる門司のプラットホームを、下駄の音の響くほど急いで出ると、中國行四國行朝鮮行の客を呼ぶ人夫の觸れ聲が雨の如くに降る。馬の鈴を鳴らして驛を通つた昔の風韻は無いとしても、夜風の中に牙ゆる招客の聲は、確かに遊子の腸に逼る凄味がある。彼れも詩中の人間であり、我れも詩中の人間である。聲は赤の他人から出ても、聞く我々は故郷を思ひ出す。恐らく晝ならばさほどでもなからう。夜は妙に凡てのものを文學化する。關門海峡の夜——それは殆んど僕の旅行の熟語となつてしまつた。汽車の都合上熊本から出發するとなると、さうしても夜になつてしまふ。歸りがけにも同じやうな都合で夜になつてくる。僕は何時でも此の海峡を夜渡つて夜歸る規

則になつてしまつた。しかも妙に月の出ない晩に限つて居るやうである。従つて僕の見た關門海峡は黒い幕に包まれた輪廓ばかりである。門司と下關との町々の燈火が、幽かに空なる星とまがうて、星や燈、燈や星、と疑はるゝやうな景色を通じてのみ、僕は關門海峡を知つて居る。だから連絡船の浪の跡を見た事が無い。平常も機關の音ばかりで、船が動いて居るなど思ひ乍ら通る。今度もそれを繰り返したに過ぎなかつた。謎されたやうな氣持で、有耶無耶の中に下關に着いた。着いたのが八時半であつて出發が十一時過ぎであつた。其の間に挟まつた三時間餘は緩くりしたものであつた。着物を着直したり、顔を洗つたり荷造りを整へたりした後に下關の夜景を見物がてら散歩に出た。出來上つて間も無い水道と一緒に出來た噴水の周輪には、涼みに來た人が一杯であつた。苟且の旅人ながら僕等も其の中に交つて、今までに溜つた汗を、噴水の涼しきで拭きとつた。噴水は停車場の直ぐ前に在る。發車時刻に遅れる氣遣ひは無い。鈴が鳴るまで噴水の縁で涼んで大坂の事などを思つて居た。

三

門司から母宅へ宛てゝ書いた葉書には、大坂の滞在を一晚として置いた。けれども思ひの外に疲れたのと、見物したいといふ弟の望みに由つて、また一日延ばすことゝなつた。僕が辨當草鞋がけで、地圖一枚を使い、にうろついた大坂は、昨日今日の記録に残されてゐるとしか思はれない。しかし指を折つて見ねば思ひ出せぬやうな昔であつた。當時僕は新しい夏帽子を被つて悦に入つて居た子供であつた。河蒸汽船が珍らしくてならなかつた田舎者であつた。それにまだ電車の無い時分のことである。普ねく大坂を見物しやう、法螺の吹けるだけの見物をしよう、流石は大坂を見て來たと感服させる見物をしよう云ふには、親から貰つた

膝栗毛の外に、店から買った地圖を携へねばならなかつた。けれども今度来て見た僕は、又別の意味で地圖を求めねばならなかつた。身長だけでも僕は大きくなつて居る。電車は四通八達して蜘蛛の網の美を編み出して居る。しかも僕は依然として地圖に頼らねばならぬ。地圖を見なければ見當が付かぬ位なら未だ良いのである。地圖を見ても見當が紛れるほどに大坂は變つて居た。内に溢れて外に擴がる都會の、外廓が變るのは常識の頷く所である。しかし之と同時に内部の變化も忘れない用意が必要なのであつた。流れ行く水の移動は表面のみのやうに見ゆる。けれども川底の水も晝夜を捨てず旅行して居るのであつた。大坂を平野と海濱との兩方向へ膨脹さして行く日進月歩の繁榮は、人力と思はれぬやうな人力である。田畑から見れば破壊となる。然し都會から見れば建設となる。破壊といひ建設といふも共に變化たることを免れないのである。何れにしても大坂は舊容を改めて居た。此の勢ならば年中どこを廻つても、どこか變らぬ所は無い筈だと思つた。林立する煙突の煙の中に、往來する電車の響の中に、あの志遂げずして斃れた豊太閤の雄心が、籠つて動いて居るのじやなからうかと疑はれた。それほどに變る大坂の、一日一日の變化を引きくるめて、何年かぶりに見る僕等の眼は驚く筈である。弟は目を奪はれて口も利けなかつた。實地を踏んだ所から弟を案内する氣で居た僕でさへ案内して居る中に自分も亦見物人だと云ふ思ひになつた。昔桑田變じて滄海となるであつた。今に大坂の市街が延び所を失つて、海を埋立てる位になれば、此の故事が實現されるわけである。そして蒼海變じて市街となるわけである。初めの豫定を一日延ばしただけ、席を暖める暇はあらうと高を縊つて居たが愈々見物に出かけて見るとそれでは足りぬと感じた。若し此の旅行が保養のためでなかつたら、若し郷里が早く來いとの打電がなかつたら、まだ／＼僕等の滞在は長ひいたことと思ふ。

大坂に着いたのは夕暮であつた。其の晩は見物を止めて旅の疲れを休める事にした。翌朝目が醒めたのは、耳に電車の響きがしたからであつた。兩戸の音や釣瓶の音に夢が破れる田舎とは違つてゐた、昨晩着いた時無い様な氣持がした庭は、あることはあつたが無いと云つても良いやうな庭であつた。隣りの家との境界のために不得已造つたものとしか見になかつた。その中に手も足も出ないやうな松が一本生ゐて居たゞけであつた。其の背景が白壁の煤けた藏になつて居るから話しにならない。僕等の家は熊本でも粗末な庭を背景として居る、しかし大坂へ持つて來ると、御客を招待する位な庭にはなると思ふ。此れが誇張とならないほどの箱庭しかない大坂である。見物する所がなくても家に居居つては居れないわけである。見物せねばならぬ僕等は朝食が済むと直ぐ飛び出したのである。回数切符で電車に乗つて先づ弟を喜ばせるために博物館の門を潜る。入口に鯨の骨格がある。弟は想像もつかぬ此の動物を見て、世の中には矢張り化物が居るものと信じたやうであつた。その下の方には小さな池があつた。池の中には白鳥が戯れて居た、泳いで居る時の画のやうな姿、それが歩き出すと見られないやうな醜態引いて何かの警噓になりそうなど考へ乍ら其の前を過ぎた。これから後に觀たものは百科全書の生きたものであつた。地理や博物で習つたものも習はぬものも、柵の中から僕等の興味を惹つて呉れた。けれども見る時間さへ急がねばならぬのに、一々記憶する時間は無論無い。たゞ飛石を拾ふやうに僕の感想を述べると、五位鶯の品の良かった事だ。これは忘れられない印象の一つである。それに隣つた檻で外の多くの鳥を觀て、これと向き合つた檻でいろ／＼の獸を覽た。そして品の良いのは五位鶯ばかりじゃない。一体に空を飛ぶものは、陸を走るものよりも、氣品が高いといふ結論を得た。これは下界を瞰下して自由に飛翔する賜物だらうと想像も付いた。柳に燕の繪と、柳に蛙の畫

とを比べて見ても分る。同じ柳に添へたもの乍ら、寂びは後者に在るけれども品は前者に在る。それは何と云つても虎や豹や獅子は堂々たるものであつた。然しとまり木に爪をかけて羽を揃へた鷹や鳶や鷺にくらべると野卑に見ゆる。威は前者に在るが品は後者に在る、僕は此處で人間の幸福がどれほど彼等の幸福に勝つて居るかを疑問とせねばならなかつた。鳥は幸福ではなからうかと古臭い美望を新にして見た。そしてあらゆるものゝ制肘を受けぬ鳥の霸王の幸福を考へた。鷺は人間よりも完全な幸福を享けて居るのではなからうか。假りにこんな質問を出されたら僕は諾と答へたく思ふ。但し此處で完全といふのは進歩を意味せないのである。進歩した點から云へば人間の幸福ほど進歩したものはなからう。人間の幸福は彼等の幸福より、より大きくより多くより華かではある。けれども惜しい事にはより缺け目があると思ふ。これは都會の生活と田舎の生活とをくらぶればわかる卑近な事實である。嗚呼我れに翅あらば。かう嘆息した文人は其の數を知らぬ。希臘のデーダルス及びイカルス父子以來、人間の空想となり、進んで理想となつた飛鳥の術は、今や飛行機となつて其の一部分を實現して居る、しかし今から幾億年後、此の地球が人間に埋め盡されて、愈々下つて水に棲むか、上つて空を飛ぶかと云ふ時代を思ふと、現代の飛行機は幼稚だと思ひ返す。

一應めぐり終つてから藤棚の下のベンチに腰を下して休んだ。其の氣持は龍南の芝生に寝轉んだほどに愉快ではなかつた。それでも物干臺より外に涼み所の無い大坂では極樂から取り寄せた涼み臺であつた。集つた人は藤棚の蔭を一寸も洩らすまいと、寄つてたかつて争つて居た。博物館は僕等にとつて新しいいろんなものを與へた。けれども結局大坂としては申し譯の濟む博物館であつた。悪く云へば冠詞に「でも」の付く博物館であつた。そこに行くと四天王寺は流石に名所らしい氣持がした。白い砂を踏んで本堂から經堂、經

堂から五重塔を廻つて行く道すがら、どう考へても繪葉書の中を歩いて居るものと思へなかつた。たゞ時の腐蝕力に耐へない古代の遺物の廢殘に哀れを催はした、此處の五重塔もかう二三十年保てようかと土着の人は語つて居た。僕は風雨に曝された、骨になつた建物の様子を見て、それまで保てようかと首を捻つた。保てないとなれば國寶が國寶にならぬ。保險にでも附しなければ再建は難かしい。縱令再建は出来るにしても、古い所に價値のあつたものである。新築されると同時に價値は零である。品も威も銷も徹もなくなつてしまふ。國粹保存の實は沒意義になる。いかに強い英國の保守論者も、かうなると開いた口が塞がらない。かくて古きものは地を掃うて、新しきものが世に蔓る。新らしいものは現實と鎖づけられて居るから勢ひ現實は重く見られてくる。明日は明日に任せて太く短く世を渡る。花火線香を見て手を叩く時勢が来る。こんな想像を恣にし乍ら天王寺を出て天王寺公園の人となつた。その園内に在る新世界や其の中に在るルナパークを見ると、想像は愈々事實らしいと確信されて來た。千日前の興行物を見るに到つて益々其の感は深くなつた。凡てのものが僕の考へに賛成して呉れた時は誇りを感じた。けれども首肯して呉れる事實が好ましくない事實だと思ふと不快になつた。不快になつても仕様がなと思ふと馬鹿らしかつた。しかし馬鹿らしいと考へる暇もなく、僕等は千日前で土像のやうに立ち竦スグんでしまつた。興行物の市場は僕等の心を奪つたのである。顧みると今までの景色は全て静止して居つた。僕にいくら考へさせる餘裕を與へた。けれども千日前は全てが光である。彩である。響である。音である。人間の五感を溶し込む手だての數を盡して、右に呼び左に誘ふ中に一步を踏み込んだが最後、人間は完全な思考力を失ふてしまふ。そして自分に手のある事も足のある事も頭のある事も忘れるのである。たゞ目ばかりが看板に向つて働くのである。たゞ耳ばかり

りが音楽に向つて働くのである、やがて看板に見えぬ音楽に聞き惚れてしまふと、もうあたりまへの人間ではない。此處で温かな懷と酔ふやうな樂をあてにして來た人が、空になつた財布を見て苦しい勞働を思ひ泛べ乍ら歸途に就くのである。此處に華かな人生がある。同時に荒んだ人生もある。染つた白粉を落し、被つた皮を剥げば、爛れた肉と毒々しい血とが露はれるのである。東京を見ない僕は、千日前ほど完備した歡樂の天地を今までに見たことが無い。何時行つても縁日である。元日から大晦日までぶつ通しの不夜城である。押すな押すなで渦を卷く人の潮は、陽氣な旋律に調子を揃へて流れ込む、愈入る時は木戸錢と一緒に魂を投げ出す、下駄と一緒に道德を預けてしまふ。しかし愈幕が下りて建物を出ると夜寒の風が吹く。ハツと氣が付いてしまつたと思ふと、十二時の時計が凄い音を立てるのである。入りがけに永久のやうに見えぬ快樂は、僅かに三四時間で終りを告げる。人は秘藏の玉手箱を開いてそれが煙であつたほどの氣分で歸る。賺され、威され、煽てられ、唆かされて、情の奴隸となるばかりでなく、情を弄ぶ興行物の奴隸とまでなり乍ら、未練の綱に曳かれて又通ふ。そして自分の同僚が成功人名簿に載る頃も、十年一日の如き馬の骨で苦しむ。因縁だ、運命だ、かう諦めは付かう。しかしその因縁も運命も自から招いたものとなれば怪しいものである。同情すべき事のやうにも思ひ、又同情すべからざる事のやうにも思ひ乍ら僕は千日前を西の方へ去つた。足指の向いた所は築港である。電車で行けば欠伸する暇も無いが、徒歩で辿れば二里はあると云ふ。一年分の目と耳を今日一日で使ひ盡した弟は、電車に乗ると間もなく、天鵝絨を寢臺にして眠りに入つた。眠つても邪魔にならぬほど席が空いて居た。それはど市内の電車よりも人が混雜して居なかつた。太陽は天に押し終つて午後二時へ傾いて居た。しかし太陽と風とは別々であつた。日は暑かつたけれども風は涼しく頬を撫で

た。僕の頭はまた默想に燃が戻る。何故人間はかうもまた、本末を顛倒する事の好きな動物であらうか。因縁と云ひ運命と云ひ皆實際の眼に見ゆる。しかも必然な産物である。それを偶然的の當り籤と思ひ、空漠と眺め抽象として取り扱つて居る。窮して因縁を濫用し、敗れて運命を連發する。その癖に成功すれば自己の才能に歸し、出世すれば自己の手腕だと誇る。こんな矛盾を平氣でやつてのける人間は辣菲のやうに面の皮が厚くなくてはならぬわけだ。しかし深く考へるとこれは鐵面皮だといふよりも、無頓著だからである。落ちて着いて歩き乍ら見落して居る。見落して居ながら氣付かないで居る。他所ヨソの親がより優しく見ゆる自分の荷がより重く感ぜられる。かうした人性に囚はれて矛盾を平氣でやつて居る。熟く考へれば直ぐ分る。例を引いても手近に在る。僕等は生れて赤兒であつた。それが五尺の男子となつた。親が育てたから太つたとも言へる。飯を食べたから大きくなつたとも言へる。手足は揃つて居る身體は健かである。これは怪我も病氣もせなかつたからであるとも言へる。漠然とした五體を細かく刻んで一本の髮一個の爪にまで其の由來を糺すと今日自己の身體は一夜造りの品物ではない。推しも推されもせぬ因縁と運命に搦められて出來た事を悟るのである。しかしこんな微細で且つ精密な履歷書は遺憾ながら種々の事情で認められぬから人間は迷ふ。生みの親さへ知らない僕等である。昨日の事さへ忘れ勝ちの僕等である。たゞ親が親だと言へばこそ、僕等も生みの親だと信じて居る。たゞ昨日と今日が似て居ればこそ、いくらか昨日の經驗が今日に通用する位のものである。これ位無自覺な不精密な時間の記録では、望み通りの履歷書を書き上げるわけにゆかないのである。誰れにしても今までに暮した何万何千日の日々の出來事の、一々を問ひ糺すことは七度生れ變つても不可能の事である。そこで人間が自己自身に對して持つ因縁觀運命觀は太古の歴史を討ぬるよりも曖昧模糊なものになる。心

がけてさへその通りである。冷淡に構へては尙ほ更らである。目に見ゆるだけいくら確かな肉體の歴史さへ斯の如くである。捉へ所の無い精神の經過した痕跡が跡を辿ると茫漠たる砂漠にその印を失つて居るのは當然である。しかしいくら鮮明な足下^{アシモト}から調べて行くと、内的生活は數條の軌跡をいろいろに残して居る。一直線に進んで來たものもある。波線を畫いて進んだものもある。時には十字に岐れ時には渦を卷いて見ねる。しかんどんな時、どんな所でどうしてこんなになつたかは謎を讀むより難かしい研究である。肉體の疵は残るが精神の傷は癒へ易い。肉體は變つても輪廓に止まるが精神は組織まで根本から改まる事がある。四肢五體の活動は見わけが付く。けれども知情意は搦み搦んで解き難い。こんな事情で現在の自己の精神は出所未詳である。しかし眠つても夢となつて働く心である。醒めて居れば否が應でも働かねばならぬ。働く方向が一定すると性質が出來てしまふ。それが形に表はれて習慣となる。無自覺な人間は目立つやうな癖を見て俺れはこんな人間だと悟る。しかしもう遅い。水は器に従ふけれども人は型に嵌まり勝ちである。枉げ易い少年期を過した後無理に枉げやうとすれば折れる虞れがある。かうして有耶無耶の中に芽を萌した性質は、有耶無耶の間に實を結んでしまうのである。今更らになつて無自覺の罪を鳴らしても、無自覺の罪を悔いても詮なき事である。無論そこに要領を得た因縁觀や運命觀を編み出す事は不可能である。そこで難船して初めて神佛の冥助を祈るやうになる。此の世の惡事をし盡した老人になると、漸く御寺參りを始めると云ふ事になる。都合の悪い時都合の良くなるやうに、一時使用する玩弄物が因縁や運命になつてしまふ。己むを得ない。此處まで思ひ廻して來た時に汽船の氣笛が聞えた。築港に近づいたのである。涼しく吹く風は海の香を運んで來る。僕は眠つて居る弟を軽く叩いた。叩かれて起きた弟は降りたくなさうであつた。實を曰へば僕も

降りる氣はしなかつた、電車は動いて行く涼み臺としか思へなかつたのである。愈降りて築港の棧橋の端まで行く間は彼れ此れ四五町もあらうと思はれた。後から披いて見た地圖には二百五十間と記してあつた。其れはど長く海中に出た棧橋は、いはゞ海中に置いた涼み臺のやうなものであつた。月のある晩などは殊に妙であらうと思はれた。電車を降りて良かつたと思はれたのも道理であつた。こんな所でビールでも飲んだら、二本飲む所は四本飲めさうだ。かう思ひ乍ら掌を眉に當て、翳しを作つて遠望の姿勢を執る。青い瓦を行儀よく列べたやうな波の遙かな果てには防波堤が波の間に隠見して居る。満々と湛へた縁を白に碎いて快走船が横ざる。煙も旗も斜に傾け乍ら黒い汽船が近よつて来る。三角や門司や尾の道を港として見た眼には、大阪がいかにも世界的の港らしく映じた。暫らく涼みがてら休みがてらの見物をやつてから又電車中の人となつた。電車の道筋に府廳も瓦斯會社も、大坂の銀座通りと呼ぶるゝ心齋橋通もあつて別に降りて見に行く面倒もなつた。同時に門前に立つて赤毛布らしい所を見せる耻も曝さずに濟んだ。大坂は何處までも水の都である。熊本縣下の橋梁を全部合せても、あれだけの數にはなるまいと思ふ。そして徹頭徹尾電氣で持ち切つて居る。交通にしても燈料にしても動力にしても皆そうである。石炭の煙は尙ほ全空を蔽うて居るけれどもだん／＼衰へて電力が之に代る傾向がある。

僕等が叔父の家に着いたのは夕暮であつた。狭い格子戸を潜ると沈香の香が浮いて来る。三年前に死んだ敏文君の正月命日に當るので、叔父は讀經を勤められたのであつた。華やかな所で香水の香を嗅いで來た後に、嗅ぐ沈香の香は僕の胸を靜めた。氣高くてしかも沈んで居る。沈んだ中に寂びが籠つて居る。僕はあんなにかの風に揺れ乍ら登り乍ら、擴がつて行く線香を見つめて居た。その淡い煙の中に亡敏文君の面影を画い

て見た。きりつとした口元に、愛くるしい眼付、僕は敏文君を思ひ出すのにたゞこれだけで十分であつた。この前大坂に寄つた時は、打ち連れて造幣局の櫻見に行つたのに。その時は黄金の華と浪の華と、天然の華と人の華とを、一所にして眺めた楽しい花見であつたのに。今や其の人なしと思うと感慨に堪へなかつた。讀經は果てしない永久の響のやうに、強く弱く、細く太く、抑揚高低の美を盡して僕の耳に傳はつた。酔うたやうになつた僕は、大坂の濁り水に一もと生れた蓮のやうな生活を送つて居られる叔父に尊敬の念を起した。冬になつても春風の吹く家庭に羨望の情を動かさないわけに行かなかつた。

記憶は臆になつたが忘れもしない。僕はある事情で母と一緒に此の叔父の住職であつた田舎に居た事がある。當時僕には一人の従兄があつた。彼れは早く父母に別れて叔父の厄介になつて居た。僕は漸やく漢字の分ワケの分る小學生であつたのに、其の従兄は横文字のヌラスラと讀める大學生であつた。愈々卒業するといふ前の年の夏である。歸つて來た従兄は其の田舎にブラブラして居つた。ブラブラして居る間に夏は遠慮なく過ぎた。棗の實が熟して九月も中旬になつた。従兄は上京せねばならなかつた。しかし上京せなかつた。たゞ毎日身体に良いと云ふ理由で、松山に登つては晩く歸つて來た。遙々歸省し乍ら歸省したらしく振舞はなかつた。生來の無口は尙ほ一層無口となつた。以前は少し朝飯が遅くなつても遅刻すると急いだ従兄である。今迄は便所に行つても何か讀んで居た従兄である。其の従兄としての此の態度はどう見ても變則であつた。自分では頭が悪くなつたから今暫くと辨解した。しかしそれは眞實の全部では無い、思はれた。僕の母なんぞは氣が狂つたのじやなからうかと或る日云つた位であつた。何かの手がかりにもならうと、叔父は人知れず子供を尾けて山にやつた事がある。其の時は子供よりも早く従兄は歸つて來た。それから二三日は山に行く景

色も見なかつた。達摩のやうに端坐して机に向つて居た。一度その室まで覗きに行つた僕は、机の上にも無いのを見て變に思つた。今から考へれば腹想に耽つて居たと察しは付く。しかし其の時分考へるといふ事は僕等と甚だ縁の遠い事柄であつた。何もして居ないと思つた僕は不思議に思はざるを得なかつた。

それから暫く經つたある曇日に、從兄は何とも曰はないで出て行つた。大方山だらうと察した叔父は子供に言ひ含めて跡を尾けさせた。しかし尾けて行つた子供は間もなく歸つて來た。どうも氣味が惡かつたからと言ひ譯をし乍ら、從兄が道の無い薄の茂みを潜つて行つた事、其の先にはドス黒い松林が暗い蔭を抱き込んで居た事等を附け加へた。其の翌日も翌々日も從兄は山に登つた。尾けてやつた子供は皆中途で引き返して來た。其の探聞で一致した所はたゞ氣味が悪いと云ふ事だけであつた。晝として解らないのは松林の奥である。けれども叔父は人の意志に逆らう事が嫌であつた。窮窟な喙を突き込んで人の自由の天地を荒らすのは苦しかつた。殊に無口な内氣な從兄を前に据ゑては尙ほ更らそれが出來兼ねた。今までも成るべく婉曲な方法を求めて居た。しかし事情は無口な弟の口を開かしめねばならぬ事となつた。放任を好む叔父に干渉を餘儀なくせしめねば己まなかつた。其の夕村は森から暮れ初めて、鐘の音に萩の露が零れる時分であつた。從兄は平常に無い元氣で歸つて來てガラガラと家の戸を開けた。

それから後の事は僕は知らない。朝寢坊だからと云ふ理由で母は寢かしてしまつたのである。それでも初めは寢つけないので蚊帳越しに部屋の方を眺めて居た。けれども叔父と叔母と僕の母と從兄との間には、何といふ事もない世間話が交換されて居るばかりであつた。何時までも此の調子か知らんと思つて居るうちに眠りは僕を夢の國へ連れて行つてしまつた。

けたまゝしい音がする。僕は眼が醒めた。バタバタと庭を走る足音に續いてガラガラと云ふ門の音がした。之と相前後してバタバタの音とガラガラの音とが、ごつちやになつて三四度聞けた。後は晝さへ靜かな寺の、夜の冷やかな氣があたりに取り殘された。眠つて居る靜けさでなくて死んで居る靜けさがそこら中に行き亘つて居た。僕は恐る恐る蚊帳を出た。激しく膊つ動悸を抑へながら母さんと呼んで見た。けれども聲は凍れて居た。また返事もなかつた。僕は氣味が惡くなつた。此の世に一人生き残つて居る人間のやうに思はれた。鼠が引いて行きさうだ、こんな淋しい氣が身体中に浸み亘つて來た。しかし何事だらう。それも知りたかつた。僕は一步を進めて見た。何事もなかつた。急ぎ乍ら忍び乍ら僕は例の部屋まで行つて見た。部屋には薄暗いランプがジージーと燃れて居た。その傍に手巾が落ちて居た。僕は拾つて見た、擴げると閃々と光つた。短刀である。人間の死を導く凄い兇器、それは僕の頭を流れていろんな想像を生み出した。僕は元の通りに手巾に包んで元の場所に置いた。もう此の上何もする氣は起らなかつた。勇氣、膽力も打ち潰されてくしやりとなつてしまつた。今まで誰れも歸つて呉れるなど祈つた心は、早く誰れか歸つて來れば良いがと願ふ心に變つた。僕は出口の方へ廻つて見た。自分の板の間を踏む足音が氣がかりな位の靜けさであつた。開いて居る戸口から空を覗くと、雲が流れてか雲の上の星が見えつ隱れつ急いで行くやうに見ゆる。耳を澄ますと蟋蟀が鳴く。秋は來て居るやうだけれども誰一人歸つて來るけはひは無かつた。僕は又元の室に歸つて元の通りに眠つた。

鳥の影が窓に映る頃僕は寢床を出た。そして昨夜の顛末を知つた。從兄は家を去つたのである、永久に此の家を去つた。しかしそれは永久に此の世を去らんがためであつた。昨夜僕が耳にした音は逃げて行く從兄を

追うて行つた叔父と叔母と僕の母の音であつた。追うたは追うたものゝ相憎の星月夜で暗さは暗しどうどう跡を見失うたのであつた。歸り道で家に残した僕を思ひ出した母は、僕が起きはしなかつたらうか、起きたら嘔淋しかつたらうと思つたと朝の御飯の席で云つた。僕の傍に御膳を置いて居た叔父は僕の頭を撫で、かう云つた。お前は兩親があつて幸福だ。兩親が無かつたからお前の從兄は死に、行つたやうなものだ。しかし兩親があつても無いと同じやうなものが居る。兩親が無くても有ると同じわけな人もある。兩親は自分の一番恩を蒙つた人である。蒙つた恩に報いねばならぬといふ一心が絶えず働いて居れば人は無暗に死ねるものじゃない。兩親を思ふ子の心には兩親の心が働いて居るやうなものである。其の子の心には三人の心が含まつて居る。自分一人分の心が死なうと追つても、後の二人分の心が生きよと勧める。叔父さんにしてもさうだ。叔父さんに子供は無い。しかし妻が居る、お前から言へば叔母さんが居る。叔母さんの恩を思ふ時に叔父さんの心は二人分の心が混つて居る。どうせ苦しい娑婆だ。自分獨りだと思へば死ぬ氣も起る。しかし妻のためだと思へば死ぬわけに行かなくなる。二人であつてさへその通りである。國家を思ひ國民を思ふ人の心には何千万といふ人の心が籠つて居る。自分の儘になる領域は、其の人の心の何千万分の一しか無い。自分の心を自分一人の我儘にせぬ。そこに眞實な公平無私がある。叔父さんは佛の遺訓を信ずるものである。佛は一切の衆生を救はうといふ大慈大悲を持たせられる。叔父さんの心を左右するものは佛の御心である。佛の御心は一切の衆生を救ひ給ふ。凡夫ながらも叔父さんの心は叔父さん一人の心で動いては居ない。一切衆生の心をその中に包み込んで居る。死にたくても死なれない。しかし自分が死にたくなくても、外の多くの人が自分の死なん事を望むなら、叔父さんは死なう。國民を救ふために戦場に行く兵士と同じ心地で死な

う。吳々もた前に言つて置く。た前の心をお前一人の所有物だと思つてはならない。た前が偉くなれば偉くなるほご多くの前から頼られる。頼られただけの人の心がた前の心の中に席を占めて居る。難かしく云へばそれが皆同等の發言權を持つて居る。どうか之れを忘れて呉れるな。た前の從兄のやうになつて呉れるな。た前の從兄はた父さんが死んだ時三人分の心が二人分に減つた。そしてた母さんが後を追うた時二人分が一人分に減つた。眼のつけやうではこの一人分の心を、何千万人分の心とする事が出来たのである。しかし兩親を失うた孤兒の悲しさは世の中を僻目で眺めて居た。社會は自分を窘めて廻つて廻り殺しにするものだと考へるやうになつた。そして社會を呪ふと同時に自分を呪うた。その瞬間に自分の心は零になつた。この際世の中が自分を苦しめなかつたら、自分一人分の心でも生きて居ることは出来たと思ふ。自分一人のためを圖り世の乍ら生きて居る人は澤山ある。また世の中が辛く當つても生きて居る人も澤山ある。これにはいろいろ理由がある。た前が大きくなつてから云はう。しかし人間には心と物との二世界がある。心の世界で満足を求めるなら、どうしても前に云つた事を忘れてはならぬ。そして眞の満足は心に在る事も忘れてはならぬ。叔父は僕の頭を撫で乍らかう云つて聞かせた。其の時は明瞭に分つたわけではなかつた。けれども其の時の叔父の顔と共に莊嚴な印象を幼な心に刻んで居る。弱冠の今になつて其の一言一句を味ふと能く其の意が胸に通ふて懷しみがある。

其の晩の事があつてから二三日して一通の封書が叔父に届いた。六錢貼つても不足税を取られたほどの長いものであつた。無論僕等は内容を知らぬ。けれども其の翌日叔父の依頼を受けた村の人々が、例の從兄の行きつた山の或る所から、一つの手箱を探し出して持つて來た。其の手箱には錠が付いてゐた。しかし鍵が

無かつたと云つて村の者は申譯をした。叔父は笑つてゐた。僕にはその意味が分らなかつた。後からの叔父の話で其の鍵が昨日の封書の中に入れてあつた事を知つた。封書さへ見られなかつた僕は尙ほ更ら手箱の隠して居る事を知らない。けれども叔父が今に大きくなつたら見せてやる。しかし叔父さんがお前に見せて良いと思ふまでは見せない。それはお前にどつて生きた教訓である。けれども悪くすればお前を殺す劇薬となる虞れがある。」かう云つて叔父はそれを片付けた。今度會つたが叔父は見せないで居る。叔父が忘れて居るのか、僕にまだ見る資格が無いのか、僕はそこに楽しい疑問を持つて居る。

讀經が済むと一緒に夕の膳に坐つた。それから思ひ思ひの會談に耽つた。初め大坂に始まつた話は廻り廻つて叔父の身上話になつた。それはやがていろんな昔の話を引き出した。昔に引き較べて今の話が出る。今の話に續いて今から先の話も話題に上る。それが僕等の話に落ちて来る。すると何時しか世間話に變つて来る。緒のあつた話は話し話さるゝ間に珠數のやうな圓みを持つて來た。何處まで行つても果てしが無い。固苦しう宗教の話でもあらうかと豫想して居た僕は、打ち解けた叔父の話に意外の暖みを感じた。たゞ明日の朝出發が早いので己むなく床を展べて貰つた。その時初めて時計の十一時過ぎなのを知つた。

四

日程も大分經つた。郷里も大分近くなつた。あれば良いと思ふ財布の底は心細くなつて、あれば邪魔になる土産物の嵩は殖ゐて來た。其の朝叔父に見送られて梅田を出發した僕等は、自宅に蟄居して居た時よりも元氣があつた。旅の疲れは見るもの聞くものに打ち消されて、旅の楽しみばかりが後に残つて居た。汽車の窓から最後の一眇を送つた時もう大坂は煙の中にあつた。徳川時代に文華の中心と謳はれた大坂はそこを見つけて

も無かつた。近松の戯曲に名高い曾根崎新地の蜷川も、地圖に名を残したまゝ埋立てられてしまつた。散つて跡の無い煙の都、流れて逝く所を知らない水の都。僕は股賑な大都會を見ながら取り止めの無い感じがした。それにくらべて熊本が親しく思ひ出されたのであつた。熊本は森の都である。森の都には自然と人工とが調和されて居る。しかし大坂では人工が自然を征服し終つて、滅びた自然を又人工で築きあげようとして居るのである。中之島の公園も天王寺の公園も愈々壯麗を極めて居る。隅から隅まで金の色の輝いて居る大坂と、果から果まで樹木の彩を凝らした熊本とは、捉へ來つて好箇の對照になる。一は黃に勝ち一は綠に勝つ、黃を擇ぶか綠を取るか若き青年の心は永く動搖の振子である。かくて大坂と別れた僕等は亦京都に迎へられた。相距る廿五六哩にもならぬ此の二大都會が、其の風俗人情に於て北極と南極ほどの差違を持つのは意外である。意外から當然へ移らうと思ふならたい熟々其の由來する所を考へたばかりで足る。大坂を去る時何よりも目に着いたのは工場の煙突であつた。京都に近づいた時最初に瞳に映つたのは東寺の塔であつた。新文明の創造物と舊文明の遺物との間に在る差違は夫々大坂と京都とを代表した差違と眺められた。京都の風と聞くと團扇片手に夕涼みの派手な女を思ひ出す。大坂の風と見ると煙管啣へて算盤を弾く主婦を思ひ出す。京都の風が大坂に感染する虞れはないとしても、大坂の風が京都に侵入しはすまいか、かう云ふ杞憂は常に僕に附き纏ふた。時勢がさうなつて來るだらう、かう思ふ毎に自分の履き馴染んだ下駄を公會の歸途に履き變へられたやうな感じを起した。しかし來て見ると京都は昔乍らの山光水色であつた。多少は變つたにしても僕には見えなかつた。最負目じやなからうかと目を擦つて見ても東山三十六峯は相變らず蒲團を被つたまゝ寢て居つた。僕は助かつたやうな心の輕さを覺えた。同時に習慣の力の強さと、之れに服従して行く人間の

弱さを知つた。又進取ばかりが人間の好む所じやない、保守も亦人間の好む所だと悟つたのであつた。

京都から先は一草一木一墓一石までか昔を語つて行く。停車場の所々に建てられた名所案内の立札は、小さく書き並べても窮屈さうに見える。僕は汽車に乗つて行く方が不自然だと思つた。どうてしも歩いて行かねば妙味は無いと感じた。汽車の窓から覗く平安の名所舊蹟では一向うつりが引き立たない。うつりは兎も角も汽車は名所舊蹟を破壊せぬやうになるだけ名所舊蹟と離れた所を走つて居る。汽車で行く僕等は多分あの邊だらう位の遠望で過ぎて行く。逢坂山も隧道の中で暗かつた。琵琶湖も水面の光に眼を投じたばかりであつた。たゞかうしていろんな所を通ると、人間の臭味といふものに氣が付いて来る。理由は分らない。研究しようと思つてするのでもない。何となく意識に浮き上つて来る。あぶり出しのやうなものである。大坂は大坂臭い、京都は京都臭い、江州は江州臭い。臭いといふと聞けが悪い。匂がすると言葉を置き換へる事にする。しかし何れにしても嗅覺に就ての言葉である。香には色も形も無い以上、形容といふ言葉そのものが色と形にしか通用せない以上、風土の臭味を一々形容のしやうが無い。東北を説明するのに東北臭いでは、説明が説明にならぬかも知れない。けれども東北は東北臭い、かうより外に言ひやうのない僕は、腕組みを餘儀なくせられる。たゞチツクや香水で誤魔化しの利く臭味でない事は事實である。かう云ふ自分自身にも臭味のある事が分つた。それも爲初めの活動寫眞のやうにボンヤリと姿が幕の上に映つたまでである。けれども其の臭味は熊本に居た時殆んど嗅いた事のないものであつた。僕に大坂の臭味が分つたのは熊本と比較したからであつた。しかし比較の標準にした熊本の臭味も實は分つて居なかつた。いはゞ白いものばかりを見て居た人間が何かの折に黒を見て、黒の黒たる所以を知り、同時に白の白たる所以を知つたやうなもので

あつた。これは取越苦勞かも知れないが、僕は思つて居る。洋行せないうちは日本の國民性を云々せない積りである。これだけの自覺を得たのは旅行の賜物であつた。僕は旅行に感謝する。平生世間の知識にマインスの附く僕は、旅行に由つて漸やくプラスに盛り返すのである。旅行は僕の頭を色あびするやうなものだ。旅行がなければ生來愚鈍な僕はコンマ以下に落ちてしまふ筈である。かくまで僕の心を囚へた旅行、一にも行旅二にも旅行と僕に信じ込ませた旅行は、一方から言へば僕の性質に投合して居るのであつた。僕は歩き乍ら書物を讀むことの好きな人間であつた。歩き乍ら考へることの好きな人間であつた。動き乍ら靜かな事をしたい、これが僕の欲望であつた。一方にこんな欲望のある僕は一方に又次のやうな欲望もあつた。出来るだけ短かい時間内に出来るだけ實の入つた事をやりたい。言ひ換へれば充實した豊富な時間を費したい。これが僕の欲望であつた。従つて僕は博覽會を見る事の好きな人間であつた。縁日や祭日に出るのが好きであつた。物の豊富を好む心は廻り廻つて物の變化を好む心となる。變化を好む心は新奇なものを好む心に固着して居る。旅行はこれらの要件を皆満足せしむるに足る資格を持つて居たのである。第一汽車は活動する文明の利器である。デツとして居ないのが氣に入る所へ、自分の足を使はないだけ怠惰心が満足する。それだけなら單調無味である。けれども絶えず目にも耳にも變化を與へて行く。それに速力が速い。そこで短かい時間で多くの事物を見せて行く。その事物が見慣れないものだとなると、僕の願うたり叶うたりな次第である。そこで僕はこんな旅行の出来るのも親の御恩だと、親の御恩を汽車の有難味で知るやうな始末になる。しかし此の有難味も一方から見ると、昔と比較して見たからであつた。五十三次を野越に山越ね。文字通りの草枕をやつた昔の事を思ふと、時間も勞力も費用もさほど要らないで出来る今日の旅行は贅澤過ぎて身に

餘る有難味を感じないわけに行かなかつた僕は亦これから先の旅行をも想像して見た。しかし同様につまらないだうと云ふ結論に終つた。それは完全な設備になる、動いて行く家屋のやうに改良されるかも知れない。しかしそれに乗つて行く人間は汽車に慣れて、それだけの安樂さもあると思はぬほど汽車の恩を忘れさうに思はれてならない。そうなると思はれたのであつた。しかもさう考へて居るのは自分だけのやうに思ふと尙ほ更ら心地が良かった。

もう米原を過ぎた。名古屋も程ない事である。名古屋から乗り換へるともう郷里に近い。旅程も終りになつた。僕も此の紀行の終りを結ばう。僕等も長い旅で疲れた。見る人も長い紀行で御疲れの事と思ふ。た互ひに今度はこれで東西に別れよう。(終り)

乙 姫 の 小 函

浦島。 少年

一部三年丙組

そ

め

と

乙姫。 人魚の化身、面長の凄艶なる美女。眼細くして、やゝ吊れり

夜の海底——舞臺裝飾は圖案的なるを要す。

龍宮の一部。幽暗なる薄明を透して、細長き海草は縦に編^{たて}を織り、朱欄を廻らせる廣き廻廊、右方より斜めに其の角を現はす。高き椽下は暗くして定かならず。迥かに海月の青き燈の、ゆるやかに明滅するを見る。